

社会的空間の変容を捉えさせる小学校社会科授業開発研究

佐藤 克士, 吉水 裕也

1 研究目的

本研究の目的は、現代社会を「脱領域化と再領域化が同時進行した結果構築された社会」と捉え、その特徴（社会的空間の変容）をスケールの重層性やスケール間の相互関係の視点から考察する小学校社会科第3・4学年地域学習の授業モデルを開発することである。

2 研究方法

- (1) 研究テーマに係わる先行研究（主に地理学・社会学）を整理する。
- (2) (1)をもとに小学校社会科第3・4学年地域学習の特質と課題を整理する。
- (3) (2)で整理した内容をもとに、社会的空間の変容を捉えさせる小学校社会科第3・4学年地域学習の授業モデルを開発する。

3 研究内容

(1) 研究テーマに係わる先行研究の整理

現代社会は、他地域（諸外国）との社会関係や相互関係が世界規模で強まることによって、社会的空間が絶えず創出・編成・再編成されている社会、すなわち「脱領域化と再領域化が同時進行した結果構築された社会」と捉えることができる。このような認識は、例えば地理学や社会学など、空間の変容や空間相互の関係性を扱う分野において、空間を所与のものと捉えず、発生、変化したり、互いに影響を与えたりするものとして捉える研究による。その発端は1980年以降、ハーヴェイ(Harvey, D. 1999)やソジャ(Soja, E. 2003)といったポストモダンの文化・社会地理学者が、空間は社会的構築物であり、かつ社会も空間的に構築されるとし、空間論的転回を提唱したことに確認することができる。これらに関してルフェーブル(Lefevre, E. 2000)は、こうした社会的空間の生産を理解するために、「空間的实践」、「空間の表象」、「表象の空間」という三つの空間の次元を認識することを提唱している(ルフェーブル, 2000)。「空間的实践」とは、「知覚される世界」、すなわち高速道路や家屋の配置などといったそれぞれの社会構成体を特徴づける特定の場所や空間配置などの物質的な空間次元である。「空間の表象」とは、知・記号・コードといった空間の言説に関わる空間の秩序であり、意識的に操作される思考される空間、すなわち都市計画や地図製作にあたって構想される空間である。そして「表象の空間」とは、象徴・映像・イメージを介して直接「生きられる空間」、すなわち芸術家の表現する空間でありユーザーが生きられる空間である。ルフェーブルは、この三つの次

元の空間が互いにズレ・拮抗を繰り返す三次元的な弁証法の関係を取りむすびながら社会的空間を生産していると捉えた。このようなルフェーブルの議論は、今日、地理学や社会学等をはじめとして人文・社会科学において議論を活性化させる契機となっている。例えば、澤・南埜(2006)は、インドのバンガロール近郊農村を事例に、開発途上国の農村というローカルな空間が、経済のグローバル化によってどのように変容しているのかを空間スケールの社会・経済システムとの相互作用という視点で明らかにしている。具体的には、グローバル化によってローカル・スケールである農村領域がナショナル・スケールやリージョナル・スケールなどの上位の空間スケールにより大きな影響を与えられている一方で、ローカル・スケールである農村領域が、空間の上位スケールへの統合が進むほど、統合された空間のなかでの生き残りのため個々のローカルな条件にあわせた機能特化を迫られている現実を明らかにしている。換言すれば、グローバル化によりローカルな存在である農村をローカルな文脈から引き離し、時空間の無限の広がりにより再構築するが(脱領域化)、同時にその再構築された社会関係が、ローカルな文脈を再度利用したり、作り直されたりしていく過程(再領域化)でもあることを明らかにしている。

このように現代社会は、グローバリゼーションの進展に伴い、様々なスケールの重層的・階層的構造を呈しており、その特徴は関係的であり、脱領域化と再領域化を絶えず繰り返す動的な現象と捉えることができる。ゆえに、社会認識形成を担う社会科教育では、ある事象の顕在を、空間の重層性・階層性を軸に、空間の生成またはその変容過程を关系的・動的に捉えさせる授業が求められる。以上を踏まえ、本研究では、これらの発想を小学校社会科第3・4学年地域学習に取り入れ、授業開発を行っていく。

(2) 小学校社会科第3・4学年地域学習の特質と課題

平成20年版小学校学習指導要領解説社会編(文部科学省,2008)では、地域学習の内容について「地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚をもつようにする。」と述べられている。具体的には、「地域の人々の生産活動や販売活動の様子には特色があることや、県(都、道、府)内には特色ある産業があること」等について理解を深めることが求められている。また、これらの学習を通して、地域社会の特色やよさへの理解に基づいて、自分たちの住んでいる地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにすること(態度目標)が最終的な目標として示されている。

このような目標を踏まえ、準拠版教科書(北俊夫ほか,2014)では、宮城県仙台市を事例に地域の存在する農家または工場の仕事を、見学や調べ学習を通して理解する内容構成となっている。具体的に小単元「農業の仕事」では、「農家では、まがりねぎをおいしくつくるために、どのような仕事をしているのでしょうか。」という学習問題のもと、①ねぎの栽培方法、②ねぎづくりの工夫、③ねぎの出荷・流通について学習する構成となっている。このような学習の特質は、農業または工場に従事する人々の行為(「工夫や努力」)

と仕事の事実（内容）を、共感的に理解することを通して、地域の人々の生産活動や販売活動の様子の特色を表面的に理解させようとする点に見出すことができる。

一方、このような学習を「社会的空間の変容」という視点から分析すれば、以下の2点が課題として指摘できる。

第一に、社会は様々な空間スケールの相互作用に成立しているが、教科書では空間スケールの相互作用やその重層性を捉えさせる展開となっていない点である。具体的には、ある事例地のねぎ栽培もグローバル、ナショナル、リージョナル、または「空間的实践」、「空間の表象」、「表象の空間」等、様々な空間スケールの相互に影響し合いながら成立している現実を捉えさせる構成となっていないのである。ゆえに事象を網羅的・表面的に理解することに留まっている。これらの課題を克服するためには、例えば農家の仕事の背後に潜む要因やその意味を科学的に把握したり、異なる空間スケールから捉え直したりする学習を意図的に組込むことが有効であろう。

第二に、取り上げられている事例地の空間が所与のものとして静態的に取り上げられている点である。我々が生きる社会的空間は、絶えず他次元の空間スケールの影響を受けながら脱領域化したり再領域化したり動的に変容している。例えば、澤・南埜(2006)のバンガロール近郊農村の事例がそうであったように、現代における社会的空間は、上位スケールへの統合が進むほど、統合された空間のなかでの生き残りのため個々のローカルな条件にあわせた機能特化を迫られている。このような状況は何もインドの農業に限ったことではない。むしろ、グローバル化が進展する現代社会においては、我が国のどの産業分野でも同様の事態に遭遇しているはずである。しかし、準拠版教科書ではこのような空間の動的な変容を捉えさせる展開となっておらず、空間（事例地）が所与のものとして静態的に取り上げられている。これらの課題を克服するためには、例えば地域住民として生きられる社会的空間（「表象の空間」）を「空間的实践」、「空間の表象」の空間次元から捉えさせたり、地域社会（ローカル）の事象をナショナルやグローバル・スケールといった広い空間スケールから捉え直させたりする学習を意図的に組込むことが有効であろう。その際、同時に空間が形成される過程（空間のプロセス）を時間軸やその他社会諸科学の視点等から多面的・多角的に考察するよう留意したい。なお、このように空間の変容や空間相互の関係性の理解を目指す授業構成に関わる発想は、吉水(2011)や、地理教育先進国である英国地理教育における単元事例案（“Schemes of work”）(DfES,2007)及び地理テキストブック（Waugh,D.Bushell,T.2006）から得た。

以上を踏まえ、社会的空間の変容を捉えさせる小学校社会科第3・4学年地域学習の授業モデルを開発していく。

(3) 授業モデルの開発

① 単元名「わたしたちの暮らしと仕事－梨農家ではたらく人々（茨城県筑西市）」

② 単元目標（知識目標）

第1次：〔産地形成に関わる空間的プロセスの把握〕茨城県筑西市は、全国有数の梨生産地の栽培が盛んである。梨栽培地としての筑西市が自然環境の適合、先人（西村七郎平ら）の貢献、自治体による振興、市場での高評価を背景に実現していることを地理（自然）的、歴史的、経済的視点から理解する。

【空間的プロセス，異なったスケール間との関係性，ローカル】

第2次：〔苦労・工夫の背後に潜む意味や理由の科学的把握〕筑西市の梨農家は、収益を継続的・安定的に得るために、収穫時期の異なる品種（ハウス栽培も含む）を複数栽培したり、害虫や病気から梨を守るために定期的に消毒したりするなど様々な工夫を戦略的に実施していることを地理（自然）的、経済的、社会的視点から理解する。

【異なったスケール間との関係性，ナショナル，ローカル】

第3次：〔空間編成の動的（再領域化・脱領域化）把握〕筑西市の梨農家が直面している問題を踏まえ、稲城市（東京都）や世羅町（広島県）、下妻市（茨城県）等の先進的事例をもとにグローバル社会での生き残るための将来の解決策を政治的、経済的、社会的から考察することができる。

【空間的プロセス，異なったスケール間との関係性，グローバル，ナショナル，ローカル】

③ 展開（全10時間）

次	小単元	学習内容	○主な問い	■獲得させたい知識【※視点】 →予想される児童の反応	・資料
1	筑西市で梨栽培が盛んな理由 (4時間) 〔産地形成に関わる空間的プロセスの把握〕	1. 茨城県筑西市で栽培している農作物を知る。 2. 学習問題を把握する。 3. 学習問題に対して予想を立てる。 4. 予想したことを発表する。 5. 仮説1に関して資料をもとに検証する。 (空間的プロセス，ローカル)	○筑西市には田や畑が多いが、どのような作物を栽培しているのだろうか。 ○市の特産物として指定されている農産物は何ですか。 【学習問題】 どうして、筑西市では梨栽培が盛んなのだろうか。 ○学習問題に対する予想をノートに書きなさい。 ○ノートに書いた予想を発表しましょう。 ※予想を全体で検討し、仮説化する。 ○仮説1について資料をもとに調べなさい。	→小麦，トマト，ピーマン，キクなど →米（コシヒカリ），そば，梨，小玉スイカなど ■梨は，国内有数の作付面積を誇る大生産地である（茨城県第1位）。 →仮説1…筑西市は梨づくりに適した環境だからかな。 →仮説2…筑西市では昔から梨づくりが盛んだったからかな。 →仮説3…筑西市の梨は他の地域の梨と比べ高値で売れるからかな。 【※地理（自然）的視点】	・農林水産省 HP 茨城県筑西市基本データ「農畜産物の生産状況」 ・筑西市 HP(農作物) ・社会科副読本改訂委員会編(2013)『わたしたちの筑西 社会科

		<p>■筑西市で梨栽培が盛んな理由は、梨栽培の適正環境である年平均気温が 12～16℃、年間降水量が 1,200～2,000mm の条件に該当する環境であり、昼夜の寒暖差が大きい自然条件であることが関係している。また、この地域は台地が多くやせた土地が多いため、穀物やイモ類、野菜類などの栽培に適さないことや、1960 年以降、梨栽培が積極的に自治体によって振興されたこと（農業構造改善事業による共同防除の実施…労働時間の短縮、省力化）、梨栽培の収益性の高さへの注目なども要因として挙げられる。</p>		副読本』
	<p>6. 仮説 2 に関して観光協会の方の話をもとに検証する。 (空間的プロセス、ローカル)</p>	<p>○仮説 2 について、筑西市観光協会の方にインタビューして調べよう。</p>	【※歴史的視点】	・筑西市観光協会観光課職員
		<p>■筑西市では、1859年（安政6年）旅人宿を経営していた西村七郎平が人々の暮らしを向上させるために特産物となる換金作物の開発・普及を考え、梨栽培を行ったことよって栽培が始まった。もともとは水稲栽培や養蚕が生業の中心で立地上（台地）、水田を所有する農家が少なく、多くの農家は収入に恵まれなかった。しかし、梨栽培が行われるようになり、貴重な収入源が確保できるようになるに従い、梨を栽培する農家が増え、梨はこの地域の特産物となっていた。</p> <p>■明治時代以降は、自治体により梨栽培が振興されてきた。1960 年代以降に梨生産が拡充され、その後も水田の果樹転作などにより、順調に栽培面積を拡大し、全国を代表する梨産地としての地位を維持している。</p>		
	<p>7. 仮説 3 に関して資料をもとに検証する。 (空間的プロセス、異なったスケールとの関係性、ローカル)</p>	<p>○仮説 3 について、資料やインターネットで調べてみよう。筑西市の梨と他の地域の梨の価格を調べて見よう。</p> <p>○筑西市ではどのような品種の梨を栽培しているのだろうか。</p> <p>○茨城（筑西）産の梨の値段と他の産地の梨の値段を比べてみよう。</p> <p>○最も高値で取引されている品種は何だろうか。</p>	<p>【※経済的視点】</p> <p>■筑西市では、「幸水」、「豊水」、「あかづき」、*「新高」、*「にっこり」、*「恵水」等の品種を栽培している。 *は県オリジナル品種</p> <p>■地元スーパーで、茨城産の「幸水」は 398 円、他産地の「幸水」は 198 円で販売されていた。</p> <p>【※経済的視点】</p> <p>■「新高」（贈答用）…1 玉（9L）2500 円。</p> <p>【※経済的視点】</p>	<p>・筑西市 HP</p> <p>・スーパーのチラシ</p> <p>・楽天「新高」</p>
		<p>■茨城県産の梨は、市場で他の産地のものと比べて高値で取引されている中でも贈答用の「新高」は、最高級のブランド梨として高い評価を得ており、1 玉（9L）2500 円以上で販売されている。</p>		
2	<p>梨農家を見て農家の仕事と工夫— (3 時間)</p> <p>【苦労・工夫の背後意味や理由の科学的把握】</p>	<p>1. 前時の学習を振り返る。</p> <p>○前回までの学習を振り返りましょう。</p> <p>2. 筑西市の梨農家に見学に行くことを踏まえ、質問事項を考える。</p> <p>○筑西市の梨はどのように栽培されているのだろうか。梨を栽培している A さんの農園に見学に行こう。見学した際に、農家の方に聞いてみたいことをノートに書きなさい。</p> <p>3. 各自が考えた質問を発表する。</p> <p>① どのような品種の梨を栽培しているのだろうか。 ② 1 年で一番忙しい時期はいつ頃だろうか。 ③ 美味しい梨を作るために工夫していることはどんなことだろうか。 ④ 梨を収穫した後、どこに出荷しているのだろうか。等</p>	<p>■省略</p>	<p>・筑西市 HP</p>
		<p>4. 梨農家の A さんの農園に見学に行く。そして、梨の栽培方法及び事前に考えてきた質問を聞く。また、A さんがしている工夫や努力の意味や理由についてさらに質問し、理解を深める。 (異なったスケールとの関係性、ナショナル、ローカル)</p> <p>○梨の栽培方法とその他それぞれが考えた質問について聞いてみましょう。</p> <p>→どのような品種の梨を栽培しているのですか。</p> <p>→どうして、この地域では「幸水」をたくさん栽培しているのですか。</p> <p>→どうして、複数の品種の梨を栽培しているのですか。</p>	<p>■梨栽培は、10 月下旬から 11 月中旬までに行われる元肥（寒肥）から始まる。以降、剪定→誘引→摘蕾・摘花→受粉→摘果→収穫→選果の順で栽培される。【栽培方法】</p> <p>■A さんの農園では「幸水」、「豊水」、「新高」、「新興」の 4 種類の梨を栽培している。この地域の農園では栽培面積の 50%以上で「幸水」を栽培している。【①】</p> <p>■「幸水」をたくさん栽培するのは、市場での知名度が高く価格が安定しているからである。</p> <p>【※経済的視点、社会的視点】</p> <p>■梨は品種によって収穫時期が異なり、種類の異なる品種を複数栽培することにより収穫量と収入を安定させることができる。また、同時に労働力を分散することにもなる。</p> <p>【※経済的視点】</p>	<p>・梨の農事暦（1 年間の主な作業）</p> <p>・聞き取りによる調査</p> <p>・梨の農事暦（品種と収穫時期）</p>

		<p>5. 梨農家の仕事と工夫について分かったことや気づいたことをノートにまとめる。</p>	<p>→ どうして、露地栽培している梨の他にハウス栽培している梨があるのですか。</p> <p>→ 1年で一番忙しい時期はいつ頃ですか。</p> <p>→ その忙しさをどのようにして、乗り切っているのですか。</p> <p>→ 梨栽培で工夫していることはどんなことですか。</p> <p>→ 梨を収穫した後、どこに出荷しているのですか。</p> <p>→ どうして、収穫したほとんどの梨を農協や市場に出荷するのですか。</p> <p>○ 梨農家の A さんの農園を見学して分かったことや気づいたことをノートにまとめなさい。</p>	<p>■ ハウス栽培している梨は「幸水」である。「幸水」は市場での知名度が高く価格が安定している。また、「幸梨」は加湿により収穫時期を早めることができ、高価販売や露地栽培の梨との労働力を分散することが可能になるからである。</p> <p>【※経済的視点, 社会的視点】</p> <p>■ 7月中旬～10月中旬の収穫・出荷時期が最も忙しい時期である。【④】</p> <p>■ 家族・親戚の他に臨時労働者を雇って忙しさを乗り切っている。</p> <p>■ 安定した収穫量と品質を維持するために4月～10月にかけて15回程程度の消毒作業を行う。また、梨を生のまま食べられるように、独自配合の堆肥や有機物肥料等を使った土づくりや、減農薬栽培など、味や安全の追求にこだわって作っている。等【③】</p> <p>■ 収穫した梨のほとんどを農協や市場に出荷し、一部を宅配や直売所で販売する。【④】</p> <p>■ 筑西市は東京・横浜・埼玉等の都市部の大消費地に近接している一方、産地自体が主要幹線道路や観光地から遠く、直売に向いていないからである。</p> <p>【※地理(自然)的視点, 経済的視点, 社会的視点】</p>	<p>・ 東京都中央卸売市場における茨城産梨(「幸水」)の月別入荷量と価格</p> <p>・ 聞き取りによる調査</p> <p>・ 関東地方の地図(縮尺1/100,000)</p>
<p>3</p> <p>梨農家が直面する課題と解決策(3時間)</p> <p>【空間編成の動的(脱領域化・再領域化)把握】</p>	<p>1. 前時の学習を振り返る。</p> <p>2. 筑西市における梨の品種別栽培面積と出荷量の推移を見て、1990年以降、栽培面積及び出荷量が減少していることを読み取る。(空間のプロセス、ローカル)</p> <p>3. 学習問題を把握する。</p> <p>4. 学習問題に対して予想を立てる。</p> <p>5. 資料をもとに、検証する。(ナショナル)</p> <p>6. 農業就業人口が減少及び高齢化による筑西市の梨栽培の帰結を考える。(異なったスケールとの関係性, ナショナル, ローカル)</p> <p>7. 栽培面積や出荷量の減少の中で、収益を維持・向上</p>	<p>○ 前回, A さんの梨農園を見学してわかったこと・気付いたことを発表しましょう。</p> <p>○ このグラフからどのようなことが読み取れますか。</p> <p>【学習問題】 どうして、筑西市では1990年以降、梨の栽培面積と出荷量が減少しているのだろうか。</p> <p>○ 学習問題に対する予想をノートに書きなさい。</p> <p>○ 配付する資料をもとに予想したことが正しかったか確かめなさい。</p> <p>○ このまま農業就業人口が減少し、高齢化が進めば、筑西市の梨はどうなるだろうか。</p> <p>○ このような状況を克服するために、稲城市(東京都)や世羅町(広島県)、下妻</p>	<p>■ 省略</p> <p>→ 1990年以降、全体的に梨の栽培面積が減っている。</p> <p>→ 栽培面積に関して、1975年には最も多かった「長十郎」が1995年に無くなり、それ代わりに「幸水」と「豊水」がたくさん作られるようになった。</p> <p>→ 出荷量は急激に増加したり、減少したりしている年があるが、全体的に減少している。</p> <p>→ 農家の仕事が大変だからではないかな。</p> <p>→ 農業をしようという若者が減ったからではないかな。</p> <p>■ 農業就業人口と農業戸数は、年々減少している。また、平均年齢は高齢化が進んでいる。その背景には後継者不足(農業を職業として選択する人の減少したこと)、重労働で得られる農業収入と農業以外で得られる収入との差が埋まらないからである。</p> <p>【※社会的視点】</p> <p>→ さらに梨の栽培面積と出荷量が減少し続ける。</p> <p>■ 稲城市(東京都)では、ブランド戦略として高品質生産を行うための徹底した栽培技術の普及と生産者組織</p>	<p>・ 筑西市における梨の品種別栽培面積と出荷量の推移</p> <p>・ 農業就業人口と平均年齢の推移(農業センサス)</p> <p>・ 農家戸数の推移(農業センサス)</p> <p>・ 生源寺真一(2011)『日本農業の真実』</p> <p>・ 宮地忠幸(2006)「改正生産緑地制</p>	

		<p>を目指して取り組んでいる地域の事例を理解する。 (異なったスケールとの関係性, グローバル, ナショナル, ローカル)</p> <p>8. 他地域で行っている先進的な事例の理由について考える。 (異なったスケールとの関係性, グローバル, ナショナル, ローカル)</p> <p>9. 今後、筑西市の梨栽培を継続的・安定的に行っていくための方策について先進的な事例先行事例をもとに考える。 [未来予測・価値判断]</p>	<p>市(茨城県)では様々な工夫をしています。それぞれ、どのような取り組みをしているのか見てみましょう。</p> <p>○どうして、稲城市や世羅市ではブランド化を目指しているのだろうか。</p> <p>○どうして、世羅市や下妻市では、第6次産業化を目指しているのだろうか。</p> <p>○今後、筑西市の梨栽培が生き残っていくためには、どのような取り組みを行っていけばよいのだろうか。稲城市(東京都)や世羅町(広島県)、下妻市(茨城県)の取り組みを参考にし、自分の考えをノートに書きなさい。</p>	<p>における厳しい検査基準の設定、農協によるチラシや新聞折り込み広告の作成・配付といった広報活動を通じて、稲城産の梨に付加価値をつけた販売を行っている。 【※経済的視点, 社会的視点】</p> <p>■世羅町(広島県)では、生産者・自治体・農協の連携による「世羅高原6次産業ネットワーク」を設立することを通して、地域産品・加工品の開発や新事業の創出など農業振興に取り組んでいる。 【※政治的視点, 社会的視点】</p> <p>■下妻市(茨城県)では、地元の下妻甘熟梨をリキュールや梨ジャム、大福餅へと加工・販売したり(第6次産業化)、アジアの富裕層を対象に高級梨として輸入したりすることを通して販路の拡大に取り組んでいる。 【※政治的視点, 経済的視点】</p> <p>■ブランド化を目指すのは、商品価値を高め、確実に利益を上げるため。 【※経済的視点】</p> <p>■第6次産業化の利点は、①農産物をそのままではなく調理・加工・パッケージ化して販売するので市場の卸価格に左右されることなく、安定した利益が得られる。②他の産地の同じ農産物と差別化(付加価値)を図ることで、高値で取引される。③加工から販売に至る中間コストを削減することができ、利益を増大させることができる。④法律上の特別措置や自治体から様々な援助が得られる等が挙げられる。農家はこれらの利益を享受するために6次産業化を目指している。 【※政治的視点, 経済的視点, 社会的視点】</p> <p>■省略</p>	<p>度下における都市農業の動態(東京都を事例として)</p> <p>・世羅町 HP ・平成23年度地域活性化ガイドブック</p> <p>・NHK「甘熟梨」で販路の拡大めざす 2013年10月4日放映</p> <p>・上田祥子編(2013)『農業ビジネスマガジン』Vol.3, イカロス出版.</p>
--	--	---	---	---	--

4 成果と課題

本研究の目的は、現代社会を「脱領域化と再領域化が同時進行した結果構築された社会」と捉え、その特徴(社会的空間の変容)を異なるスケールの重層性やスケール間の相互関係の視点から考察する小学校社会科第3・4学年地域学習の授業モデルを開発することであった。

本研究の成果は、第一に、現代社会の特徴を「脱領域化と再領域化が同時進行する過程」と捉え、その特徴(社会的空間の変容)を異なるスケール間の重層性や相互関係の視点から考察する社会科授業に関して第3・4学年地域学習を事例に開発したことである。第二に、本研究を通して、社会的空間の変容を多面的・多角的に考察する社会科授業を開発したことである。これは、学習指導要領が求める考察方法と重なる。また、次期学習指導要領の改訂を睨んだ上で、今日の社会経済システムを適切に理解させることをめざす社会科授業開発に寄与する点は少なくない。

今後は、開発した授業モデルの有効性を検証していく必要がある。

【参考文献】

- DfES(2007): Unit 18 The global fashion industry. *A Schemes of work Geography at key stage 3*,
<URL>http://eduwight.iow.gov.uk/curriculum/foundation/geography/keystage3/Unit_18_.asp (2014年5月10日閲覧)
- アンリ・ルフェーブル,(Lefevle,E.) (斉藤日出治訳) (2000)『空間の生産』,青木書店.
- 上田祥子 編(2013)『農業ビジネスマガジン』 Vol.3,イカロス出版.
- 北俊夫ほか(2014)『新編 新しい社会 3・4年』,東京書籍,pp.70-83.
- 澤宗則・南埜猛(2006)「グローバル化にともなうインド農村の変容」人文地理学会『人文地理』 58(2),pp.125-144.
- 社会科副読本改訂委員会 編 (2013)『わたしたちの筑西 社会科副読本』,筑西市教育委員会.
- 生源寺眞一(2011)『日本農業の真実』,筑摩書房.
- エドワード・ソジャ,(Soja,E.) (加藤政洋ほか訳) (2003)『ポストモダン地理学』,青土社.
- デヴィッド・ハーヴェイ,(Harvey,D.) (吉原直樹監訳) (1999)『ポストモダニティの条件』,青木書店.
- 林琢也ほか(2008)「首都圏におけるナシ栽培の存立条件」,『地域研究年報』 Vol.30,pp.33-68.
- 宮地忠幸(2006)「改正生産緑地制度下における都市農業の動態—東京都を事例として—」愛知教育大学地理学会『地理学報告』 第103号,pp.1-16.
- 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説 社会編』,東洋館出版.
- 吉水裕也(2011)「地理的スケール概念を用いたマルチ・スケール地理授業の開発—中学校社会科地理的分野『身近な地域の調査「高知県春野地区」』を題材に—」日本地理教育学会『新地理』 第59巻第1号,pp.1-15.
- Waugh,D., Bushell,T. (2006): Fashion and sport, *NEW KEY GEOGRAPHY Interactions*. Nelson Thornes, pp.68-85.